

生きている炎

書肆奇想堂 <http://kisodo.web.fc2.com/>

生きている炎

彩宮菜夏

1.

村には昔から、生きている炎が棲んでいる。

いつの頃からは誰も知らない。一番年寄りの婆さまが私より小さかったときには、すでに炎たちが村を自在に駆け巡っていたそうだ。

「昔は炎と遊んでやるのは、子どもらの仕事だった」

糸繰り車を回しながら、婆さまは前にそんな話をしていった。

今となっては、大人も子どもも思い出したときにしか、炎の相手をしてやらない。遊んでくれる人がいない間、炎は勝手にあちこちを走り回って跳ね、ときおり樹木や草花に焦げ跡を作っている。村に悪さはしないけれど、たまに悪餓鬼が小便を掛けようなどとしようものなら、たちまち飛びかかって火傷を負わせる。村には、それがきっかけで顔に焼け焦げを持つおじさんが何人もいて、酒の席で自慢の種になっている。

私はオブラ。この間十四になったところで、近々嫁に行かないといけない。村の西の隅のちっぼけな家に、母さんと婆さまと三人で暮らしている。

「オブラ。今日も炎は元気かね」

すっかり眼も萎えて椅子に座ったままになった婆さまは、昼頃になると思い出して毎日そう言う。私は頷く。

「今日も元気だよ」

「今日は何匹いるね」

「六匹ぐらいだね」

「そうかい。なら今日の夕暮れ時には、雨が降り出すだろうね」

婆さまは盲いた眼で私を見据え、けたけたと笑った。

こういうとき、本当に夕方になると大雨が降るのだ。婆さまには炎の様子を聴くだけで外で何が起きるか分かるらしい。どうやっているのかは何度訊いても分からなかった。いつか私にも、分かる日が来るのだろうか。

「オブラ！ イリイロのところへお使いに行つてちょうだい」

母さんが台所から言った。

「嫁入り後のあなたの仕事を聞いてくるんだよ。向こうの親父さんがおみやげをくれるはずだから、大切にもらっておいで。それと、イリイロとい加減仲良くしなさい。もうじき夫になる人だろ。いつまで文句垂れりや気が済むんだい」

家の奥から出てくるなり私にそう怒鳴った母さんは、ふん、と鼻を鳴らすと、すぐにまた戻っていった。私は口を曲げ、窓から外を見る。軒先ではこの間生まれたばかりの仔犬が、一番小さな炎とじゃれあって遊んでいた。

私はイリイロのことが、吐き気がするほど嫌いだ。

2.

「なあ、オブラ。少しは俺の顔を見ろよ。なあ」

イリイロの家からの帰り道、私は夜だというので付き添ってくるイリイロのことを、徹底して無視しながら足を速めた。あいにくイリイロの家とうちは村の正反対にあるので、距離が長い。毎度面倒くさいことこの上なのだ。おまけに月もない日なので、辺りは真っ暗だった。

イリイロは言う。

「次に新月が来る頃には、お前は俺の嫁だ。嫌でも四六時中、顔を付き合わせなきゃいけない。だったら、今のうちから慣らしておいた方が楽だ」

「後々嫌になるほど見る羽目になるから、今は見たくないんだよ」

私はそう言って、地面につばを吐いた。イリイロの薄汚い顔など見る気はなかった。

するとそのとき、私たちの行く先に揺れる炎が見えた。

それは、飛び跳ねている炎数匹だった。炎たちはたちまち私たちの元へやってくる、じゃれつくように私たちの周りをぐるぐると廻りだした。

機嫌がいいようで、攻撃的な様子はない。闇の中で炎が尾を引いて火の粉が散り、とても綺麗だった。

私はしゃがみ込むと、近くに転がっていた木の枝を拾い上げて、炎をじやらして遊んでやった。生きている炎は枝に何度も飛び付いて、燃え移ろうとした。私は上手いこと、それを避け続ける。炎は賢い。私が小さい頃はこれと同じことをしても、なかなか炎を出し抜くことが出来ず、むしろ弄ばれていたものだ。

イリイロは、大きな声を出す。

「お前、俺の何が不満なんだよ！」

「どこに満足する。頭は悪い仕事は出来ない、他の男と会えば文句ばかり、酒癖は悪い話は面白くない。それでよく堂々としていられるな。私なら、恥ずかしくてとつくに村から逃げ出しているぞ。このろくでなしの穀潰し」
私は可能な限り冷たくそう言い放ちながら、炎に近くの草の葉を千切つて投げてやった。すぐに炎はそれに絡みつく、焼き尽くしてしまう。草を抜いたときに指が切れて、私の人差し指の先から、血が流れ出していた。

イリイロの家では、婚礼の儀の簡単な相談をした。誰かが結婚する度、村を挙げての儀式をやらなければならないのだ。村長も出席して大々的な宴会になり、それが三日三晩延々と続く。男たちは昼になると眠り、夜になるとまた起き出して、酒を飲みながらどんちゃん騒ぎを続ける。そんなものに、花嫁も花婿も付き合わなければならない。もちろん、単に酒を飲むだけではない。この村ではさらに、生きている炎も関わってくる。

早い話が、炎に酒をやるのだ。すると当然、炎は大きく燃え上がる。酒宴の間、村の人々は辺りに酒をまき散らし、それに近付いた炎が、化け物のように揺らめき出すのだ。大きくなっても、やはり炎は生きている。まるで野山に生きる動物たちのように、のっそりとした動きになった炎は村の人々の周りをゆるりと巡り、顔や姿を紅く照らし出す。時には耐えられないほどに熱くなり、汗が止まらなくなるけれど、それでも宴会は終わらない。酒を飲み、炎に酒をやり、婚礼の儀はいつまでも続く。
そんなような説明を受けただけだ。

「誰がろくでなしだ！ 夫に向かって勝手なことを言うな。女には分からない事情があるんだよ。俺だって精一杯やってるだろ。文句なんか言うな。女は女の仕事をしなければいいんだ」

背後から、イリイロの激昂げっこうした声が飛んでくる。こんなのと一緒に、長丁場の儀礼を耐え抜く自信がない。私はイリイロを無視して、炎の姿をじっと眺めていた。炎は、私たちの愚かしい会話なんか知りもせず、無邪気に大地の上を転がっていた。美しかった。また小さな火花が散った。

一体炎が何者なのか、なぜ私たちの元にいるのか、それは分からない。

私も、十二になってよその土地へ連れて行ってもらうまでは、「普通炎は生きて動いたりはしない」ということを知らなかったのだ。海辺の集落へ行ったとき、竈かまどの炎がいつ生き生きと蠢き出すのかと見つめていて、村長の弟にたしなめられた。「これはこのまま燃え続けているもので、鍋を温めるのに飽きても勝手にどこかへ行ったりはしない」と聞かされて、ずいぶん驚いたものだった。

また、よその土地では炎を「作り出す」ことが出来る、というのも、信じられなかった。うちの村では当然、一度だって炎を「作った」ことなどない。炎というのは生きて、その辺をうろろしているものなのだから。必要になったら呼んできて、竈の中に入れてもらうだけのことだ。心地よさそうな薪たきぎを組んでやれば、喜んでやってくる。それを使って水を沸かしたり、肉を焼いたりする。

「……今はそうやって粹がってられるかも知れないけどな、結婚したらもう、お前は俺の物だ。そうしたら、毎日好きにするからな。覚えておけ。俺に偉そうな口を利けるのも、今のうちだけだ。婚礼の儀さえ終われば、後はお前に自由なんかないんだ。お前は一生、俺の一人目の嫁だ」

まだ後ろで、イリイロが何かを言っている。下らない。一言だって耳に入れたくなかった。どうしてあんな馬鹿馬鹿しいことを、目を剥いてやっきになって言うことが出来るのだろう。ああいう振る舞いが「男の誇り」というやつなのだろうか。

男は、自分の誇りを守るために堂々とした態度で、胸を張って生きていかなければならないのだ、と隣の家のおじさんが、酒をだらだらと呑みながら話していた。それがあれなのだろうか。うんざりする。そんな誇り、すぐに捨ててしまえばいいのと思う。

炎たちを左右に連れながら歩いて、私たちはようやく家にたどり着いた。母さんも婆さまも、とつくに寝入っている。家には灯りなどないので、外から見ると中は真っ暗だ。一方、炎はまだ互いにじゃれ合って、私の足下で揺れている。

そこまで来たところでようやく振り返ると、私は溜息を吐きながら、イリイロを見据えた。

口を尖らせて幼児おきなごのように不満の顔をしている彼は、ぎつ、と私を睨み付けた。

私は、出来る限り感情を込めないよう、こう言った。

「好きにすればいい。もうどうせ逃げられないのだから、私は文句なんか言わない。結婚すれば確かに、私はお前の物だ。それは認める。けれどそれは、お前とそして村の男どもがそう思っているだけのことだ。私には、そんなこと関係ない」

「はあ？」

「関係ないんだ。私はそんなこと認めない。絶対に。たとえ結婚してお前の家に住むことになって、家から出られなくなっても、毎日お前の好きなように使われたとしたって、私は決して、お前の所有物だなんて認めない。お前と、男たちがそう思いこんでいるだけのことだ」

「そんな勝手が許されるわけ……」

「何も勝手などしていない。私は認めない、と言っているだけなのだから。誰が何と言おうが、私はお前の物になんかならない。お前がどれだけ私を押しえつけようとしたって、私は自分を、お前の物だと認めない。私の気持ちの中ではな。それを止めることなんか出来ない。私は、お前の物にならない。何があるうと、絶対に」

私はイリイロをまっすぐ見て言った。

絶句していた彼は、次第に癩癩を起こして、真っ赤になった目をこちらへ向けた。

3.

村には昔から、炎にまつわる昔話がたくさん伝わっている。大体が、この世界の成り立ちに関わるものだ。昔話に依れば、原始、私たちは炎から生まれ出たらしい。大きく燃え上がった炎が口を開いて、最初に男を産み、次に男が、炎の中から女を取り出した。だから私たちは、死ぬときには炎の中へ没するべきである、とか。さらにさかのぼると、炎自身は大地がぱっくりと割れ、その裂け目から噴き出し生まれてきたのだ、とか。このように神話も伝説も、みんな炎と何かしら関係している。

だからなのは分からないが、私たちの生活も、炎たちと強い繋がりを
持つている。先にも話したように、料理の時や暖を取る時などは当然だが、
一番分かりやすいのは、狩りの時だろう。

村の男たちは、よく慣らした炎を連れて、動物を狩りに出かけるのであ
る。飼い慣らすといっても、もちろん炎は犬や鷹のように従順ではないか
ら、人間の側が上に立てるとは限らない。いかにして炎に従ってもらうか
が、狩人の腕の見せ所になる。

炎を連れて狩人は、野牛や猪といった動物を見つけると、自分の連れて
いる炎を巧みに誘導して、動物の周りを取り囲むのだ。炎が転がり駆け抜
けた場所には炎が燃え移るので、次第に広い範囲が焼け始める。それを利
用して、動物たちを追い詰めていくのである。もちろん、一歩間違えば自
分が炎に囲まれて仕舞いかねない。細心の注意が必要な仕事だ。これまで
にも幾人もの狩人たちが、命を落としている。私の父もその一人だった。

父は、私が幼い頃、猟場で焼け死んだ。自分の遣^{つか}っていた炎に巻かれて
のことだったらしい。父の最期を見た父の友人は、「まるで父は踊ってい
るかのようだった」と話していた。日も暮れかけ、空も紫色に染まりだし
た頃、父は草原の中で炎に取り巻かれ、炎に包まれながら、一人踊ってい
たらしい。熱さで苦しんでなのかそれとも自分の意思で踊っていたのかは、
今となっては分からない。誰も助けることなど出来なかった、と聞く。そ
れはもう、そういうものなのだと考えるよりほかないだろうと思う。村に
生まれたからには、遅かれ早かれ、いずれ炎と共に死ぬのだ。

私の同い年の連中も、そろそろ炎を連れて狩りに出かける年頃である。
時々背中に大火傷を負って、泣きながら帰ってくる男の子がいる。そのく
せ、数日経って傷が癒えようと、自分がいかに大冒険してきたかを誇らしげ
に語り出すのだ。大きな動物（決まって名前がはつきりしない）に深傷^{ふか}を
負わせ、相打ちで自分も火傷^{やけど}を負ったのだ、とか何とか。嘘を吐^つけ、と思
う。なお、念のため言えば、イリイロはそもそも怖がってまだ狩りに出た
こともないので、そんな話はおくびにも出さない。そんなところも嫌いだ。
一方、女の子は男とまるで違う炎との関わり方を選ぶ。家事や灯り取り
といった日々の生活の中で、巧みに炎を操っていくのだ。生きている炎た
ちは、いつも村の中や周囲をふわりふわりと跳びはね、転がっている。た

まにふつ、と風に乗って、短い距離だが宙を飛んでいるときもある。必要
なときに、女はそれらを連れてこなければならぬ。

呼べば来る炎もいれば、無理矢理連れてこようとしたところで絶対に言
うことを聞かない炎もいる。当然炎なのだから、掴んだり引つ張ったりし
て連れてくることは出来ない。人間から強引に触れて働きかけることは不
可能なので、上手に馴らして、必要なときに協力してくれるよう普段から
気を遣っていなければならぬのだ。その分、私たち女の方が男たちより
深く、炎と関わっていると私は思う。

幸い、生きている炎を操るための数え歌が、村の女の間には伝わってい
る。誰でも小さな頃に教えられて、生きている炎と戯れ遊びながら憶える
ものである。

- 一つ 火の仔を迎えてやりたきや
- 二つ 不思議と愛想もよくなる
- 三つ 見る見る夫婦みよとも寄り添い
- 四つ 誼よしみは堅く厚くなる
- 五つ 意地張り嘔吐き腹立ちや
- 六つ 婿嫁むよめ逃げるも無理はない
- 七つ 泣く子も撫でれば笑おう
- 八つ 焼かれる日を待つ間
- 九つ この世を踊って暮らせ
- 十で どうとう虚ろへ還る

こんな歌だった。

意味はそのまま、簡単である。要は、人として柔らかで暖かく、付き合
いも上手に情に厚く生きていれば、自ずと炎も従ってくれる、というだけ
のことなのだ。事実、柔和な優しいおかみさんほど巧みに炎を操り、家事
全般をあつという間にこなしてしまう。草むしりなんか全くしなくても、
彼女の家の周りは綺麗なものだった。炎が意識してなのか偶然なのか、雑
草を程よく焼いてくれるからだ。一方、ぎやあぎやあがみと性格の悪
いおばさんになると、湯を沸かすのにもいちいち苦労している。癩癩を起

こして手に火傷を負っている姿を、何度も見かけた。

炎は、放っておいても仕事など一つもしない。普段は遊んでいるだけの存在である。世界を明るく照らし出すとか、愚かな人を罰するとか、神話の中ではずいぶんと立派なものとして描かれているけれど、そんなご大層なものではないのだ。ただ地面を転がり、思い出したように宙を飛び、満足しているように私には見える。

そんなものが本当に、この世界を生みだしたのだろうか。婆さまも母さんもそう信じているので、何も言わないことにしているけれど。

3.

たちまち、半月が過ぎた。夜になると、満月が空に昇っている。次の新月の日が、結婚の日になる。そのことを思い出す度、身体が足指の先から腐り始めているような、じわりじわりとした嫌な感覚があった。

「お前の花嫁冠を作らにゃ」

暗い家の中で、婆さまがぼつりとそう呟いた。私は何も応えなかった。

花嫁冠というのは、結婚の儀礼で私が被ることになる、草木で作った冠である。あまり綺麗なものではなくて、ある種類の樹を切り出して削るだけの無骨な作りだ。普通は、花嫁の父親がその木を切って小刀で削って形を整え、それを母親が草花で飾り付けして作る。けれど私の場合、肝心の父親がいない。

「どうするかねえ。お義母さん」

母さんはこういうとき、なぜだかいつも私に向かってすごく申し訳なさそうな表情をする。別に母さんの所為で父さんが死んだわけではないのに。

「……オンデイラが取ってくるのが、筋だ」

婆さまは一言、そう答えた。

オンデイラとは母さんの弟で、私の叔父にあたる人である。ただ、その解決策にも問題があった。母さんは溜息を吐く。

「あの子には任せられないでしょう、何も」

「何を言う。父親の代わりは、母親の兄弟がこなすもんだ」

婆さまに言われると、母さんは沈黙してしまった。私も助け船を出すこ

とは出来ない。婆さまに強く言われたら、もう誰も言い返すことなど出来ない。

オンデイラ叔父さんは、もう何年も前に村から追放されているのだ。

4.

翌朝、私は炎を一つだけ連れて、叔父さんを訪ねに村を出て行った。村のみんなから不審がられないよう、なるべく早朝に出発した。どうせ儀式の時には叔父さんに作ってもらったと知られるとはいえ、それまでは出来る限り、ことを穏便に済ませたかった。

オンデイラ叔父さんは、変わり者として知られた人だ。村の長おきに言わせれば、要するに「頭がよすぎた」。小さい頃から暇いとすらさえあれば、他人に悪戯を仕掛け、面倒を起こしては叱られていた。

例えば、祭り用の楽器の見た目はそのままに、音だけを他の楽器と入れ替えておいたり、近所のおじさんがくしゃみすると同時に穀物倉を潰したり、四十年掛けて伸ばしていた村長の髭むらおきを焼いたり。端から見て笑えるものもあれば、笑えないものもあった。そして結局人々の記憶に残るのは、たちの悪いものばかりである。叔父さんは年を追うごとに酷い悪戯を重ね、村での立場を失っていった。

そして、村から追い出されるきっかけとなったのが、炎を使った悪戯だった。私はまだ、三歳の時のことである。

叔父さんは不思議と、生きている炎を手なずけるのが得意だった。別に狩りに行く回数が多いわけでもなく、特別に訓練が上手いわけでもないのに、不思議と炎が、叔父さんに従うのだ。必死になって炎を付き従わせようとしているよその人からすれば、これもまた面白くないことだった。ただ遊び歩いているだけに見える叔父さんが、炎を見事に自在に操るのだから。この所為で、叔父さんは余計に嫌われていった。でも、叔父さん自身はそんなことを全く気にしている様子ではなかった。

ある時のこと、叔父さんは突然、村中の炎を自分の支配下に置いた。どうやったのか、何のためにやったのかは、未だに誰にも分かっていない。とにかく、村の全ての竈かまど、囲炉裏いろり、狩りのための炎も含め、村内にある

炎の一つ残らずを日の沈みきった夜中、当時叔父さんが一人で暮らしていた村の家に呼び寄せたのだ。

炎はひよいひよいと飛び跳ねて、一行に行儀よく並ぶと、暗い村の道をまっすぐ叔父さんの家へと向かっていった。誰がどんなに怒鳴りつけても、炎は言うことを聞かなかった。そうして家にたどり着いた炎に向かって、叔父さんは小声で何かを指示したという。

途端に、炎は叔父さんの家へ飛蝗ばったのように飛び付いて、勢いよく燃やし始めた。集まった村人たちは、ただただ茫然とするよりほかなかった。何しろ叔父さんは、まだ家の中にいるのだ。窓から、炎に包まれながらも椅子に腰掛けて静かに俯いている叔父さんの姿が、赤々と見えた、と聞く。集まった生きている炎たちは、一つの巨大な炎となって、叔父さんの家を轟々と焼き続けた。火の手は天まで届くかと思われたらしい。しかし誰も、止めることなど出来なかった。叔父さんは逃げだそうとせず、燃え盛る家は今にも崩れ落ちそうになった。

そのとき、うちの母さんが、炎の中に飛び込んだという。誰の助けも借りずにだ。もちろん、その頃私の父さんはとくに亡くなっていたので、頼れる相手など誰もいなかったのだが。母さんは、居間にいた叔父さんの元へ行き、力づくで叔父さんを引張って、家から連れ出してきた。不思議と、叔父さんは抵抗しなかったという。叔父さんが出て数分後に、家はあつけなく崩壊した。

そんなことをしたのが原因で、叔父さんは村から追放されることになった。反対意見は母も含め、誰からも出なかったという。叔父さん自身も不平一つ言わず、数少ない荷物を背に負って、火事の翌日には一人、村を旅立ったらしい。しばらくは叔父さんがどこへ行ったかも分ならず、ほとんどの村人は死んだのだと考え、縁は完全に途切れたままだった。

叔父さんがトリーヨー山の麓ふもとに小さな家を造って暮らしている、と分かったのは、今から三年前、私が十一歳の時だ。

5.

村は、広大な山脈に囲まれた平原のちょうど中央に位置している。北へ

向かえば暗い森があり、南には澄んだ川が流れている。東と西が狩り場だ。普通に生活していれば、森に行く用などないが、今日は仕方なかった。叔父さんは、森と平原の端境に住んでいるのである。

すっかり日が昇りきった頃、私はようやく、叔父さんの家に到着した。家の中に向かい、私は声を荒げる。

「オンデイラ叔父！ 姪のオブラだ！ いるか！」

返事はない。とはいえ、中にいても叔父さんは気が向かなければ応答しないので、気にせず私は、その粗末な小屋の中へと入っていった。

木々の生い茂る土地のそばに、見るからに一人で造ったと分かる雑然としたなりの小屋は建っていた。屋根も適当な草葉を積み上げてあるだけだから、強い風が吹いたら飛んでいきそうだった。でも、あのオンデイラ叔父さんのことだから、何か裏には上手い策が使っているのかも知れない。小屋の壁面には、何かの呪術のためか、見たこともない奇妙な記号がたくさん顔料で書いてあった。

小屋の中は外よりもさらに不可解だった。岩を削りだして作ったのだろう浅い皿が、床や机の上に無数に並べられているのだ。壁際には柵が作っており、そこにも皿が並んでいる。そのそれぞれには外の壁に書いてあったのと同じ、妙な記号が書かれていた。私は首を傾げ、しばらくそれらの皿をしげしげと眺めていた。

「……だあれだ!？」

背後から急に声を掛けられたので、驚いた私は飛び上がって振り向いた。そこには、明朗に笑っているオンデイラ叔父さんがいた。相変わらず痩せているけれど、表情を見る限り元気そうだった。

汚れた獣革の服を着た叔父さんは、肩に大きな鹿の死骸を掛けていた。そして、身の回りには、五つもの生きている炎を連れていた。いや、それだけではない。叔父さんの背後を見れば、まだ家の中に入ってきていない炎が一目で数え切れないくらいたくさんいて、ふらふらと遊び回っていた。私は目を見張り、少しの間、身を硬くしていた。まるで悪魔の手先のようなだった。

いひひひひ、と愉快そうに笑う叔父さんは、話し始めた。

「オブラ一人でこんなところまで来させられたか。難儀なことだ。会った

ところでどうにもならないのに。人間は顔を合わせたがる。要は気休めなんだ。ふふ。オブラ。くつろいだらいい。ところで、もう幾つになったんだ？ 俺は自分が幾つか、もう分からんが。お前はどうか？」

相変わらず、叔父さんの話は聞いているうちにどんどん脈絡なく飛んでいって、趣旨が分からなくなる。叔父さんとしては混乱しているつもりはないらしく、例えば家事とか道案内のような実際的な話題になると、一貫して落ち着いた語り口になるのだ。

でも、普段の会話や、叔父さんが面白いと思っている何かについて語り出すと、途端に普通の人間は話題について行けなくなる。こういうところも、村の大人たちは気にくわなかったそうだ。けれど、私はそれほど嫌じゃない。

「座りなさい。椅子がある」

叔父さんがそう言うので、私は手近な一脚を引き寄せて、腰を据えた。

叔父さんは狩りからの帰りらしく、手持ちの袋から何やらざらざらと自作の道具を取り出して、一つずつ丁寧に棚へ片付けていた。見たこともない不思議な道具ばかりだった。

同時に、驚いたことに炎たちも、おのおの転がったり飛び跳ねたりしながら、先程の石の皿の上へと自ら登っていった。私は目を見張る。叔父さんに何を言われたわけでもないのに、しまいにはあちらこちらに並んでいる皿の中で、小さな炎がそれぞれ揺れていた。

とうとう叔父さんは、炎を自在に操れるようになったのだろうか。私は炎の群を指さして言った。

「オンデイラ叔父、これは」

「炎は炎だけで動いているのではないということだ。オブラ」

しかし、叔父さんはこちらの話を最後まで聞かずに話し出す。

「オブラには今、炎しか見えんだらう？ でもな、炎は炎だけではないのだよ。炎には、向かう先がある。流れがある。俺は要は、それを知っているに過ぎん。行く先を知っていれば操るのが用意なのは、人間と同じだ。そう思うだらう？」

言って叔父さんは、くくくと笑っている。沈黙する私を気にせず、叔父さんは話を続けた。

「ほとんどの者は、目の前にあるものしか見えん。しかし目の前にあるものは、いつももっと大きな何かを見ているのさ。自分の愚かしさを知らない人間は、自分は全てを見ていると誤解している」

懸命に考えたけれど、今日も私には理解できそうになかった。いや、叔父さんの話は基本的に訳が分からない。けれど聞いてみると、どこことなく納得できる気がするから不思議だった。

「まあそのうちオブラにも教えてやるよ。オブラならすぐ、炎を使えるようになる……そうだ、炎の名前の話はしたか？」

「名前？」

いきなり叔父さんが目を輝かせるので、私は肩をすくめるしかなかった。もう止められそうにない。それに炎の名前なんて、神話にも出てきた覚えがなかった。私は問う。

「何だ、それは？」

「炎には名前がある。それを呼べば炎は応え、動いてくれる。考えてみれば当たり前だろう？ 我々には名前がある。それなら、炎に名前があってもおかしくない」

「まあ……」

「エルシュ」

不意に叔父さんは、そんな言葉を吐いた。

すると——近くにあった皿の上の炎が揺れ、僅かに大きく燃え盛った。私は目を見張った。

「……今のは、炎が返事をしたの？」

「さあ。話は通じんからそんなことは分からん。もしかするとこの言葉が、炎に力をもたらす呪文なのかも知れん。でもな、同じことじゃないか？

俺ら人間の名前も、働きは呪文と等しい。オブラもオンデイラも、我々を生かしている呪文だ。名前はただそういうものだ。だろう？」

繰り返し聞きながら、叔父さんは満足げに笑んだ。これは、割合に理解できる気がした。名前は深い意味を込め、幸福な生を送れるようにするのもだ。オブラという私の名も、確か古い言葉で何か意味があるらしい。実は婆さまだけがそれを知っているけれど、まだその意味は教えてくれなかった。婆さまは、死ぬ間際に教えてやろう、と笑っている。もう充分死ぬ

間際だと思うのだが、どうやら当分、話すつもりはないようだった。

「で。誰か死んだか？」

「え？」

正面に腰掛けるなり、おもむろに叔父さんがそんなことを言ったので私は目を円まるくした。

「いや、違う。何でそんな……」

「ここへわざわざ来るといふことは、葬式なり成人の儀なり、そういう用事があるのだろう。嫌でもこのオンデイラにやらせにやらん仕事。差し金は姉さんか？ 婆さまか？」

「だから違う。その……大したことではないが、私の、花嫁冠造りを手伝ってもらわねりやならなくなつて……」

少し恥ずかしがりながら、私は事の次第を説明した。叔父さんは私の話を、こくこくと頷きながら聞いていた。

「ふうん。そうか、もうオブラは嫁に行く歳か。面倒だろうな。しかし、伝統とは誰でも生きられるように作られた嘘のことだ。従つていれば死にはしない。どうするかはお前次第だ。俺は馬鹿馬鹿しくなつて逃げ出したが、お前は従うが吉かも知れない。だがな、今のお前の話を聞く限り、お前はそいつ、その何とかという馬鹿者と夫婦めおとになりたくないのだろう？」

木彫りのカップに水を注いでぐいと呑みながら、叔父さんは言った。私は頷く。すると叔父さんは、肩を揺らした。

「だったら、止やめてしまえばいい」

「どうやって」

「例えば、そいつを殺せばいいんじゃないか」

いきなり叔父さんがとんでもないことを口にしたので、私は目を剥いた。

「え!？」

「おい、何を驚くことがある？ 当たり前のことだ。そいつがいるから、そいつと夫婦にならなきゃならない。だったら、そいつがいなくなればいい。人を殺すのなんか簡単だ。このカップを作るより楽だ」

「いや、しかし……」

「何を躊躇ちゅうちゆっている？ オブラも愚かじやないんだから。自分の仕業と気取られず人を殺すことぐらい出来るだろう？ 本当に夫婦めおとになるのが嫌な

ら、殺ればいい。それとも、そこまでする気はないということか？」

叔父さんは首を傾げた。私は何も応えることが出来ない。正直に言えば

——心のどこかで、「その方法もあったか」と思ってしまったのも事実だ。あいつさえいなくなれば、あんな奴とこれからの長い人生を共に過ごさなくて済む。何十年だか分からないが、馬鹿馬鹿しい愚鈍な時間を後悔しながら生きずに済むのだ。

殺すなら、あいつが一人にいるところを見計らって炎をけしかければ、それでたくさんだろう。鈍くさいイリイロのことだ。助けられる間もなく、死ぬに決まっている。私は当分寡婦扱いされるのかも知れないが、あんなのと同じ家で暮らすぐらいなら、湿っぽい顔の芝居でもしていた方がましだ。

こうしてただぼんやりしている間にも、どんどん考えが具体的になっていく。私の頭の中が透けて見えるのか、叔父さんは嬉しげな表情でこちらを眺めていた。

小屋の中には無数の炎が揺れており、影が壁のあちこちに出来て、異様だった。呪術師の家のような。昔の祭りで一度だけ観た、炎を使った影絵芝居のことを私は思いだした。叔父さんは、続けて呟く。

「出来るなら、殺してしまえばいいのに」

「いや、でも……」

愉快そうな叔父さんを見て、私は口籠もった。オンデイラ叔父の場合、私を嗜めるための術としてこんなことを言っているのではない。本当に本心から、イリイロを殺してしまえば問題は解決する、と告げているのだ。

やむを得ず、私は正直に答えた。

「……うん。分かった。検討してみる」

「検討？ 別に、決めてしまえばいいのに。まあいいだろう。俺には関わりのないことだ。それに、今日の用とは別問題だしな。いいよ。花嫁冠の土台ぐらい、すぐ造ってやるよ。一週経ったら、また来てくれ。そのときには出来ているはずだ。そのときついでに、殺すつもりなのかそうでないのかも教えてくれ。殺すつもりなら、いい方法を考えてやる」

叔父さんは一息にそこまで言い切ると、何だかどっと疲れが出た様子で、机に肘をつけて、黙り込んでしまった。叔父さんは昔からの、気持ちの上り下

りが激しい性質たちでもある。

私は、もう用は済んだのだから帰ってしまおうかな、と少し考えたが、ふと思いついて、叔父さんに一言尋ねてみた。

「なあ、オンデイラ叔父。村に戻るつもりはないのか」

「……ああ？ ああ。いや……特にはない」

気もなく叔父さんは応えた。私はさらに言い募る。

「もうそろそろ、いいとは思わないのか。誰ももう、オンデイラ叔父を責めてはいないぞ。私たち家族も、女ばかりでは暮らしにくい。狩りをしてくれる男が必要だ。もし今、私がイリイロを殺して結婚しなかったとしても、どうせ遅かれ早かれ、また下らない男と契りを結ぶ羽目になる。だったら、叔父さんが戻ってくれた方が話が早い。そうじゃないか？」

私は言った。それなりに筋は通っているつもりだった。イリイロ以下の結婚相手など村には見あたらないから、他の誰かなら受け入れてもいいか、という気はあるのだが、しかし面倒くさい。叔父さんが戻ってきてくれる方が簡単だ。あと、私は叔父さんのことを気に入っている。

「……戻るほどの理由が、特にはない」

急にやる気がなくなったらしい叔父さんは、つまらなそうに答えた。視線はそっぽを向いている。私は眉を顰めた。

「私を助けるというのは、理由にならないのか」

「オブラは自分の身を自分で助けられるだろう。グナハも強い。オレが行かなければならない理由にはならん」

グナハというのは母さんの名前だ。

「戻れというなら、俺でなきゃならん理由が要る。現に、花嫁冠の用でもない限り、お前たちは俺を必要としていなかっただろう。だったらこれからだってそうだ。今まで要らなかつたのに、これから俺でなけりゃならん理由が突然出来るとは思えん。そして、俺は村でやりたいことはすでに一通り終えてしまった。人間と接する必要ももうない。だったらこうして、納得いくように一人で生きる方が、俺も村の連中もお互い有意義だ」

叔父さんはさすがに切れ者らしく、すらすらとそう話した。それはその通りだろう。これまで叔父さんがいなくても何とかなったのだから、事について呼び戻すというのも勝手な話だ。私は、頷くしかなかった。

そうして叔父さんとは、また来週冠を取りに来る、と改めて約束を交わし、私は小屋から外へ出た。太陽はもう、高々と昇っていた。振り返ると小屋の中に、多くの炎が揺れている。オンデイラ叔父は、椅子に腰掛け机に肘をつき、「こちらを見ようともせずはどこか何も無い中空を眺めている。私は別れの言葉も言わず、小屋から立ち去った。

6.

しかし村へ帰っても、頭にあるのはイリイロをどうしてやろうか、という考えばかりだった。どうして今まで思いつかなかったのだろう、と思う。ここまで不快でここまで不満なのだから、あいつがいなくなればいかにすつきりすることか。

家を片付けていても、母さんの手伝いをしていても、婆さまの話聞いていても、胸の中ではくすんだ感情が渦を巻いている。時折目や耳や口から、嘔き出しそうになった。

「……何を考えているんだい」

婆さまが糸繰り車をふいに止めて、私にそう尋ねた。私は答えた。

「……何も」

「何も考えてない人間なんか見たことがないよ。そりや死んでるんだ。生きてる人間は何か考えてるだろう。ほれ、お言い」

「……」

上手いこと嘘を吐けるほど、器用な性質でもなかった。黙る私に、婆さまはフン、と鼻を鳴らす。でも、腹を立てている様子ではない。どちらかといえば、面白がっているようでもあった。

「ろくでもないこと考えてるのかい。忘れてしまったがいいよ。自分でもろくでもないと思うことなんて、本当にろくでもないんだから。せめて自分でまじだと思っただけ考えたがいいさ。そうすりや、他人様からろくでもないと言われるだけで済むんだから」

そうぼそぼそ言うと、婆さまは椅子の上でけたけたと歯抜けの口を震わせて笑った。

そんな間にも、私の頭の中では酒が醸造されるように、イリイロの殺し

方が細かく定められていく。炎で焼き殺すのがたやすい。だったら、いつでもどこでやるか。日付は、むしろ婚姻の儀の近くがいいだろう。あいつや村の連中が浮き足立っているところを狙った方が簡単だ。場所は、村の中ではいけないが、でも屍体が一日や二日で見つかる処。狩り場から少し離れた辺りがいいだろうか。

そこで一斉にあいつへ襲いかかるよう、炎をし向けるのだ。幸い、イリイロは炎から嫌われている。だからあいつをことさらに嫌っている炎を見つけて出して、あいつを焼いて、それでおしまいだ。数日後、捜しに出た村の誰かがあいつの焼死体を見つけるから、私は後はしばらく悲しむ振りをしていればいい。簡単な話だ。

簡単な話なのに、実行するにはどうも二の足を踏む。

叔父さんの小屋から戻って三日が過ぎ、四日が過ぎた。じわりじわりと周りでは婚姻の儀の支度が進められていく。私に知らされる部分もあれば、秘密裏に進行する部分もある。秘密裏の部分というのは、男だけでやっているところであって、つまりろくでもない内容なのだ。「女には手出しさせない」というところが、必ずどんな行事にも儀礼にも入っている。

まあ、それ自体は構わない。当然女だけでやって男には手を出させない仕事というのものもあるのだし、それが役割分担なのだからやむを得ないものだ、ある程度は。男たちがろくでもないのは、自分たちが独占していることを威張り、調子に乗っているところだと思う。女に手出しさせない部分というのは立派であり大切であり価値があり、偉大なものだと思いきんているのだ。馬鹿馬鹿しい。男には手出しさせない女の仕事があれば、男どもは食事一つ摂ることが出来ないというのに。

そして、今日でもう六日経った。私は家から出ると、空を見上げた。天空にはかんかんと尊大に太陽が照り映えていた。太陽から伸びる光の矢は、まっすぐ私たちの足下にまで届き、地面を焼き、日々世界に力を与えている。それは炎を見ても分かることだ。天気の良い日には、生きている炎たちは明らかに普段よりも活発に活動している。飛びはね、転がり回り、たまに戯けて身を大きくしたりする。ちょうど、動物が毛を逆立てるようだった。

太陽と炎の伝承というものがある。先にも語ったように、炎は大地から

噴き出し生まれた。では炎の塊である太陽が、なぜ天に浮いているのだらう、というお話だ。一言で言えばこれは、月が地上から炎を連れ去っていったからなのだ。

その昔、世界は闇に満ちていた。この世で照り輝いているのは月と星たちだけで、それも弱々しいものだった。そこで、月は地上に降りてきた。すると、一カ所だけ明るい地を見つけた。それがこの村だった。村には、大地から噴き出した数多くの生きている炎たちが棲まっけていて、辺り一帯があまりの明るさに、何も見えなくなるほどだった。

そんな様を見た月は、多くの炎たちを一息に捕まえて、天に連れ戻り、大きな一つの塊にして、それを太陽として放したのだ。天に放たれた多くの生きている炎たちは、思う存分に光り輝き、この世に明るさをもたらした。それによって世界は今のようになったのだが、しかし太古の暗い世界から生き続けている月と星たちにとって、それはあまりに目映まばゆすぎた。

そのため、月と星たちは闇と共に、太陽から遠く離れた場所へと逃げだし、それが夜となり、世界には昼と夜という秩序が生まれた。そして村には今でも、そのとき月に捕らえられなかった生きている炎たちが、暮らしているのである。だから、炎たちは太陽の照り輝く日には、懐かしさから大きく飛びはね、天の炎に恋い焦がれる。婆さまから聞いた話だ。

炎たちは今日も、無邪気に跳ねている。幼い子どもたちが珍しく、炎を追いかけて回して遊んでいた。子どもたちはわいわいとにぎやかな声を上げて、炎の周りを駆けている。炎たちは、子どもたちの先に立って転がっていた。時折大きく燃え上がることもあったが、子どもたちに対して敵意がないことは、この距離からでも見て取れた。

元々炎は、子どもが好きなのだ。悪心のない子どもと遊んでいるとき、炎たちは最も活気づいている。たぶんだけれど、それぐらいの時期、子どもたちは炎と対等なのだ。炎を下に見たり、馬鹿にしたりしていない。炎と同じ立ち位置から、炎と共に物事を楽しむことが出来る。

ある年齢より上になると、子どもたちは炎のことを操る対象としか見なくなる。私もすでにそうだ。村に生きる以上、それは仕方ないとも言える。炎を巧みに操れる者こそが立派な大人であって、生活もしやすい。だから、少しでも大人びた感情が出てきた子どもは、炎と楽しげに遊んでいる同じ

子どもたちを鼻で笑い、蔑むようになる。そして、大人たちに教えてもらった炎を操る術を使い、ちよつとした芸のようなことをやって見せて、それで子どもたちの中で英雄気取りになるのだ。

しかし、そうなってくると同時に、炎の側が彼らに関心を失っていくらしい。過剰に大人ぶって炎を虐げようとすると、全く言うことを聞かなくなったり、ひどい場合だと反抗してきて、子どもの側が大火傷を負うことになりかねない。子どもはそうした手痛い経験を重ねながら、程よく炎と付き合う方法を学んでいくのである。

自分があの子たちと同じくらい幼かった頃、炎のことをどう思っていたか、時折私も思い返す。あまりにも身近で、あまりにも自然な存在なので、取り立てて意識することもなかったように思う。共に遊ぶのが当然のものだった。今となっては「生きている」炎、とわざわざ断って呼ぶが、あの頃は炎は生きているのが普通だったから、取り立ててそんな呼び名は使っていないかっただと思う。炎と戯れ、渾然一体となって過ごしていた。幸福な時間だった。もうあんな日々は、帰ってこない。

「……明日は、雨だね」

突然背後から婆さまのしわがれた声が届いて、私は驚き、振り返った。椅子に腰掛けたままの婆さまは、誰に向かってでもなく呟いた様子だった。

「雨？　こないいい天気なの？」

訝しみながら私が問うと、婆さまはにったりと、余裕ある笑みを浮かべた。

「いい天気だから、雨は激しくなるのさ。今日がいい天気の方、明日はひどい天気になる。しわ寄せだね」

炎の守まもりを忘れるでないよ、と婆さまはやや大きな声で言った。

7.

婆さまの言ったとおり、夜半には大雨になった。真っ暗な時刻、私は降り募る雨音で目を覚ました。

昼見た光景が嘘であったように、家の外にはごうごうと雨が注いでいた。もう、叔父さんの小屋から戻って一週になる。雨脚がもう少し弱まったら、

日の出ているうちに叔父さんの処へ行き、花嫁冠をもらってこないといけない。

そこまで考えた私は、ということはイリイロの処へ嫁に行くまであと一週しかないのだ、と気づいて、何だか世界の全てが地に沈んでいくような倦怠感に襲われた。このまま私も、イリイロも、叔父さんも、母さんも婆さまも村の人も、みんな溶けて死んでしまえばいいのに、と思う。そうすれば、誰も不幸にならず済む。私は雨を気に留めず、家から外へ出た。

村の中央にある広場（ここで婚礼の儀は行われるはずだ）まで出向いてみれば、いつも通り、生きている炎たちは寄り集まって震えながら、小さくなっていた。私はぐしょ濡れになって近付いていった。

広場には小さな櫓がある。祭事がある時には、ここを村のみんなが取り囲む。その櫓の下に、炎たちは隠れていた。陰の中に小さな小さな火の粉の灯りが見える。雨の日には、炎は木の実ほどの大きさに縮んでしまうのだ。ぶるぶると小刻みに震えているものもある。どれも、今にも消えてしまいそうだった。

生きている炎は、少々水に濡れたくらいでは消えたりしない。悪餓鬼がたまに炎へ水をかけることはあるが、じゅつという音と共にたちまち蒸発させてしまい、じきに悪餓鬼の方が炎に追い回される結果となる。だから普通なら炎を心配する必要はないのだけれど、こうした豪雨の日は話が別だ。

この村の近辺にこれほどの大雨が降ることは、年に数回しかない。いつも霧がぼんやりと煙って、草葉を湿らす程度で済むのだ。しかしこのように大雨が降ると、狩りや木の実取りにもいけなくなるから、しばらく村に食べ物がなくなる。いざそのときになって困らないよう、私たちは普段から食べ物を倉庫に蓄えている。だが、炎のことは別問題だった。

私は家から持ち出してきた小さなカンテラを二つ取り出して、蓋を開けた。もう婆さまが娘の頃からずっと使っているものだから、あちこち錆び付いて、壊れかけている。蝶番の軋む音を聴いたのか、炎の一つが陰から恐る恐る、姿を現した。

私は、炎を怯えさせないよう濡れた髪を絞り、それからカンテラの隅をカチカチと指先でつついて、音を鳴らした。炎はその音につられ、ゆるゆ

ると地面を転がり、濡れたところを器用に避けて、私の元までやってきた。そしてそのまま、カンテラの中に入って身を落ち着かせた。

一つ目の炎が収まるやいなや、あちこちの陰から次から次へと、小指の先程の小さな炎たちが現れる。暗い地面を小さく照らしながら、炎たちは私の持ってきたカンテラへ、我先にと入り込んでいった。たちまちカンテラは、夜の広場をぼやりと照らし出すだけの灯りを放ちだした。

もう炎が出てこなくなったと思った私は、カンテラの蓋を火傷しないようそつと閉じ、腰を上げた。雨が降っている間は、手空きの家が炎の守をしなければならぬのだ。村の昔からの習わしである。早めに炎を確保しておいた方が、豪雨の中での灯りに困らない、という実際的な理由もあるのだが。

カンテラの中を覗き込むと、小指の先程に小さくなった炎が、ころころと転がったり、ぶるぶる震えたりしていた。櫓の外からは耳をつんざくようなうごうごという雨音が響いてくる。そんな暗い処で見る幽かそけくなった炎の姿には、吸い寄せられそうな魅力があった。

私は櫓の下から出ると、身体でカンテラを庇いながら家に向けて歩いた。全身が重く濡れていた。こんな天気でも、今日は叔父さんのところへ行つて、冠を受け取ってこなければならぬ。そういえば、イリイロを殺すのかどうかを叔父さんに返事しなければならぬのだ。次第に気が進まなくなつて、この数日すっかり忘れていたのだ。気持ちが進まず億劫になつた。

でも——恐らく、叔父さんはそんなことはとつとくに忘れているだろう。冠が出来上がっているかどうかすら危うい。

気にする必要はないのだ、と私は思い直した。そして、戸口をくぐり、カンテラを大事に抱えたまま屋内に入った。

8.

日が明けてからも、雨は収まる様子を見せなかった。村の道には泥水の流れが出来、倉庫が一つ崩れ、蓄えが失われた。村の男たちが倉庫に集まって何とか修繕し、穀物やら肉やらを回収しようとしていたが、たぶん無

駄だろう。この雨の中だ。何をしたところで、直した先から他のところが壊れていく。私たち女はそんな光景を、家の窓から眺めているより他なかった。眺めている限り、イリイロが仕事を手伝っている様子はなかった。私は窓を閉めた。

黙って、私は叔父さんの元へ出かける支度をする。母さんに話したらこの雨の中だと反対されるだろうから、あえて気づかれないよう注意する。出来れば、黙ったまま出ていきたい。

別に今日行かなくてもいいといえればいいのだろう。明日でも明後日でも、婚姻の儀に合えば冠などいっただってよい。けれど、もはや半ば意地だった。さつさと婚姻の儀の支度を済ませ、死を待つ心地で当日まで肅々と過ごし、そしてその日になったら不平一つ言わず、あいつと夫婦めおとになってやろう、とそう決めたのだ。いじいと考えていること自体がいやになつた。そうだ。どうせ悩んだところで、イリイロを殺すことなど出来るはずがない。当たり前だ。母さんにも婆さまにもイリイロの家族にも迷惑が掛かる。

イリイロは引き裂いてやりたいほど嫌いだが、イリイロの家族は悪い人たちではないし、苦しめたくはないのだ。そう。そこが上手くできている。ある一人がろくでなしでも、その周りの人間は大体、善人なのだ。なぜなら全員がろくでなしだったら、世の物事が先へ進んでいかないから。人の集まりが破綻していないなら、そこには真つ当な人間が含まれている。

そして周りの人間は、その中央にあぐらを掻いているろくでなしと、それなりの関わり合いがある。好き嫌いには関わりなく、繋がりがあある。一言で言えば、「縁」というやつだ。だから、仮に邪魔だとしても、ろくでなし一人を処分すると、全員に何らかの迷惑が掛かってしまう。

たとえイリイロのような人間であろうと、消え去れば「縁」に影響を与え、歪みをもたらすかも知れない。そしてだから、人間はそう簡単に殺されたりしないのだ。どんな人間だろうと誰かと関わり合っている限り、人と人との繋がりが合いの一部を担う。担っている以上、そう簡単に消し去られたりはしない。

言い訳を並べたけれど——だから、イリイロを殺そうという気にはなれない。結局、なれなかったのだ。それが叔父さんに対する答えだ。私には

無理だ。自分一人の不幸を避けるために、人一人を殺し、大勢の人に迷惑をかける気にはなれない。だったら私が、ちよつとした不幸を毎日背負い続けて生きている方が、ましな気がする。それは、私の弱さなのかも知れない。叔父さんなら、きつとこう言うだろう。

「そんな決断をしたところで、周囲の人は誰も喜ばない。お前一人が責任を負った気になって満足しているだけだ。無意味だ。それなら、周囲の間を少々不幸にしても、お前一人が自由な人生という完全な幸福を手に入れた方がいい。その方が価値がある」

それはたぶん、その通りなのだろう。

でも私には、そんな決断が出来ない。

ごうごうと降り募る雨の中、私は誰にも気づかれないまま家を出た。雨除けに頭上に載せた木の板に大粒の雨が当たり、バラバラと大きな音を立てている。村の周辺では普段あまり雨は降らない。川は遠いし、水は井戸から汲み上げている。だから大雨というのは、いつもならそう悪い気はしない。こんな時でなければ、一日中眺めていてもいいくらいだ。

雨の中を、黙々と私は進む。

雨にまつわる神話もあったろうか。当然、あるはずだ。婆さまからも母さんからも、聞いていると思う。けれど、不思議と思いつけなかつた。どうしてだろう。いつもこんな自然の変化を見ると、まずは神話や昔話を思い出すのに。頭の中は真っ白だった。雨音や雨から来る寒気に、身体が支配されているのかも知れない。私は濡れた髪が顔に貼り付くのを嫌って、自然と下を向いて歩く。地面には、幾筋も水が流れていた。途中で枝を作って網目のように分かれながらも、最後には再び一つの大きな流れに集まっていった。

叔父さんの家までの道筋には、動物すらも一匹たりとも見あたらなかつた。どうどうと激しい音を立て降り続ける雨のせいだ、まるでここが私の知らない、一度も来たことのない場所であるかのように思えてきた。何も聞こえない。少し先は煙って見えない。自分の手の届く範囲のことしか分からない。そんな場所を、私は頭に気休め程度の板を載せて歩いている。

ようやく、叔父さんの棲まう小屋に着いた。

様子がおかしかつた。顔を上げ、私は訝しんだ。これだけの雨で辺りが

暗くなっているというのに、窓から見える小屋の中もまた、真つ暗なままだった。たくさんいた火は、どうしてしまったのだろう。私は板を投げ捨て、小屋へ近寄る。

焦げ臭い匂いがした。

小屋の中へ入ると、時折部屋の隅で、小さくなった炎がちりちりと揺れているのに気づいた。けれど、何もしてこなかった。雨に濡れたからというよりは、何か他に理由があつて身を縮めているようだった。かと思うと突然、ぼつ、と微かに音を立てて大きくなり、自分がいることを示している。こんな姿の炎を見るのは、久しぶりだった。私は暗い表情で、小屋の奥へと踏み込んでいった。

ごく僅かな灯りしかない小屋の奥には、以前来たときに腰掛けた椅子と机が、変わらない様子で並んでいた。

その机にもたれ掛かつて、叔父さんが死んでいた。

奇妙な死に様だった。薄暗い中で見える叔父さんの口元は、焼け爛れていた。それだけではない。喉も、胸の一部も、腹も、酷い火傷を負っていた。だがそれは、炎が皮膚にくっついたからではないようだった。それなら身体の表面が焦げているはずだろう。そういう様子はなかった。

皮膚は一カ所も焼けておらず、しかし身体の各所が黒ずみ、裂けていた。私は神話の炎の誕生の物語を思い出した。大地がひび割れ、炎が噴き出し、生きている炎は生まれた。そんな具合に、叔父さんの身体は内側から破れていた。中には大きな穴の空いているところもあった。穴からは、叔父さんの肋骨が見えた。私はそんな叔父さんの遺体を、無感情に眺めていた。

恐らく叔父さんは、炎を口から大量に呑み込んだのだろう。

私は目をそらす。机の上には、頼んでいたとおりの、いや、それ以上の綺麗な冠が据えてあった。目を見張る緻密な彫刻が施され、とても一本の木から彫り出されたとは思えない、見事な出来映えだった。じつと見ていると、あまりに立派すぎてふざけているかとも思える。これではまるで、どこかの王国のお姫様の被る品のようなだった。

私はそれを手に取った。思ったより、ずっと軽かった。

私は無性に、寂しい気持ちになった。

9.

翌日、早速叔父さんの葬儀が村で営まれた。思いのほか大勢が、葬儀に参加してくれた。ひよっとしたら家族だけで内々に処分してお仕舞いになるかも知れない、と思っていただけに、意外だった。村の成年の男が普通に死んだときと何も変わらない、きちんと手順に則った儀礼が行われた。

昨日叔父さんの遺体を見た時、呪術師のおばさんは苦い顔をしていた。炎は人間に呑み込まれたぐらいでは死んだりしないから、腹の中に入っても消えず、暴れ続ける。何とか抜け出そうとして、人を内側から焼き始める。叔父さんはたぶん幾つも幾つも呑んだから、体内では想像も出来ないほど激しく燃え上がったことだろう。痛み苦しみは、生きている人間には想像もつかない。「なぜこんなことをしたのか、全く理解できない」と呪術師は吐き捨てるように言った。私も理解できなかったし、もしかしたら叔父さん自身も、自分のやっていることを理解していなかったかも知れない。

葬儀は、昼から夜に掛けて続いた。普通なら、大人の男たちが集い集って、生前の記憶を語りつて時間を過ごす。しかし叔父さんの場合は珍しく、誰も語るべき思い出を持っていなかった。もちろん忘れてしまったわけではないのだが、大人の男として語るべきこと、それは例えば、勇猛果敢な出来事とか、他人を護った出来事とか、そういった叔父さんに関わる立派な類のことが、男たちには思い出せなかったのだ。仕方なく男たちは、ただ集まって乾杯を繰り返すばかりだった。

一方、宴の裏では女たちがぼそぼそと、叔父さんについての思い出話を幾つも幾つも繰り返していた。話の種は尽きることがなかった。表で話すほどではない下らない記憶なら、幾夜を費やしても終わらないぐらいあったのだ。

十に満たない頃から女に手を出していた話、その後で男にも手を出していた話、影で喜んで女装をしていた話、そのくせ妙に腕っ節は強かった話、婆さま方の語る伝説や昔話を一言一句語り口に至るまで片端から憶えてしまった話、酒を一口でも呑むとベロベロに酔って倒れてしまう話、風邪を引いただけで死に怯えて泣きじゃくった話、笑い話の名手だったという話。

とにかく、そんな話は際限なく出てきた。そしてそのどれもが、面白かった。私の知らない話もたくさんあった。女たちは嬉々として語り、笑い、たまに涙した。死んで初めて、叔父さんは村で愛されていたのだ、と私は知った。

葬儀は、夜が更ける前に終わった。葬儀の最後には、叔父さんの遺体が火を灯され、焼かれた。例の櫓のそばで、叔父さんの身体の周りによく燃える葉が敷き詰められ、そこへ生きている炎がゆるゆると近づいていった。たちまち空一杯を白色に染め上げるほどの煙が、もうもうと上がった。恐ろしく煙い。でも、この葉が焼ける匂いのおかげで、叔父さんの遺体の焼ける匂いは掻き消されてしまう。そればかりか、燃えているのかどうかも目で確かめることが出来なかった。私は目を瞬かせながら、叔父さんがこの世から去る様を眺めていた。

人は炎と共に生まれ、炎と共に没する。新しく生まれた子供は儀礼の中で生きている炎に近づけられ、ほんの少しだけ髪の毛を焼かれて、村の子としての生を与えられるのだ。なぜ頭に火を近づける、と以前婆さまに訊いたら、「赤子は頭を先に、女の炎のような場所から出で来るじゃないか」と大笑いされた。

そして、死ぬときにはこうして炎に巻かれ、この世からあっさりと消えるのだ。跡形もなく。

人を焼くとき、炎は色合いを変える。赤や橙だけでなく、黄、そして青、緑と変化していく。その様は美しかった。炎の考えていることなど人間には永遠に分からないが、少なくとも今、生き物が死に、弔われていることだけは理解しているのかも知れない。

炎は天高く舞い、その光で私たちに影が出来た。影は伸び縮みし、歪み、化け物の姿になって、地面に映し出されていた。ぱちぱちと火花が爆ぜ散った。その幾つかは、私の顔に掛かった。針で刺されているようだった。

こうして、男たちに諺られ、女たちに愛され、誰からも理解されることなく、ただ炎と戯れるために一生を費やしたオンデイル叔父は、その生涯を閉じた。

10.

婚姻の儀は、なし崩しで中止になった。当然だ。村全体が喪に入るし、私自身はもつと厳しい喪に服さねばならない。

それに、冠が問題だった。すでに作られてしまった以上、私の婚姻では叔父さんのあの冠を使わなければならない。代用品を作る叔父さんより親しい近親がいけないのだから致し方ない。けれど、かといってあの冠を使うわけにもいかないのだ。あんな悲惨な遺体と共に置かれていた冠には、死穢しえがまとわりついている。そんなものを婚姻の儀に用いるわけにはいかない。つまり、板挟みの状態になってしまったのだ。婚姻の儀を進めるわけにも、やり直すわけにもいかない。

それを聞かされたとき、イリイロは顔を真っ赤にして痲癩を起こした。

「そんな馬鹿な話はないだろう！ それじゃあいつまで経っても、オブラは嫁に來れないじゃないか！」

「そういうことになるね」

うちにやって来て地団駄を踏んでいるイリイロに、婆さまは落ち着き払って答えた。

「どうしようもないよ。そういう決まり事なんだから。生きてるもんにはどうすることも出来ない」

「そんな話、納得できるか！」

激昂して机に拳を叩き付けたイリイロは、きっと私を睨み付けると、いきなり腕を掴んで、連れ去ろうとしてきた。私は振り払い、眉を顰める。

「……何をするのだ」

「何をするんだじゃない。うちに来るんだよ！ お前はもう、俺の嫁だ。そっちが決まり事だ。何が冠の事情だ。そんなもの、どうだっていい！

下らない。俺はもう、お前をもらおうと決めたんだ。お前も領いたろう」

「領いた憶えはない」

「いいや領いた。はっきり領いた。憶えてる。別に構わないと言って領いたはずだ。今さら文句は言わせない。來い！ 絶対逃がさない！」

目を血走らせて真剣にそんなことを言うイリイロとは対照的に、その頃

私はすでに、すっかり冷め切っていた。もしかしたら、このまま勢いで連れ去られていたら、何となしで本当に嫁になっていたかも知れない。しかし、そうはならなかった。

「恥を知れ、イリイロ！」

地鳴りのような声を上げて、イリイロの親父がうちに乗り込んできた。

私たちの様相を見るなり、息子の返事すら待たず、親父は拳をまっすぐ息子の脳天へと振り下ろす。木がへし折れるような音が鳴り、イリイロは私の手を放すと、そのままその場に昏倒した。白目を剥いていた。

結局、そんな流れで私の婚姻はなかったことになった。

そればかりか、他の嫁入りの話すら来なくなってしまった。元々イリイロの話が押し通される前までは、それなりに村の男連中から話しかけられたりもしていたというのに、叔父さんの死以来、めっきりなくなってしまった。おかげで男と仲良くなるきっかけもなく、婚姻など叶いそうもない。

†

そしてもう、それから六年ばかりが過ぎている。私は二十歳になった。完全に行き遅れだ。周りに同い年でも年上でも、独り身でいる者など一人もない。子をなして育てている女がほとんどだ。

そんな中、私は一人だけ、相も変わらず母の家に住み続け、家の手伝いをしたり、村の仕事をしたりして生きている。婆さまは三年前に死んだ。幸い、すでに周囲の男たちも私を女として扱わず、仕事を手伝う一人前の人間として見なしてくれる。おかげで働きやすかった。

イリイロも当然嫁をもらい、子を作り、立派に男として村の仕事をこなしている。あの頃の愚かさはどこへ行ったのか、今や謙虚に人の話を聴きながらも、筋の通った働きぶりを見せている。たまに顔を合わせると、挨拶をしてくる。村長や大人の男からの評価も高かった。ひよっとしたら将来、村長になるかも知れない。しかし周りからそう言われても、イリイロは一向に驕ることなく、日々を淡々と過ごしている様子だった。私はそんな彼を、家の窓からつまらなく眺めている。

私はといえば、婆さまから伝えられた昔話を幼い子たちに語ってやり、オンデイラ叔父が小屋に残した道具なんかを整理することを、日々の楽しみにしていた。この二つの仕事は、ずいぶん楽しんで出来た。特に、オンデイラ叔父は小屋に様々な書き付けを残していた。それは絵だったり記号だったりもしたが、不思議なものでじいっと眺めていると、少しずつ、にじみ出るように意味が分かってくる代物だった。

私はそれを毎日見詰め、時たま内容を解した気になったときは、生きている炎を見つけて出てきて試してみるのが常だった。書き付けの中は、八割方が炎に関する事、つまり炎の生き様や炎の操り方についてだったのだ。それも多くは、これまで誰からも聞いたことのない、意外な事実ばかりだった。

初めは読み違えや、失敗ばかりだった。人の家を焼きかけたり、逆に自分の衣服を焼きかけたりすることも、珍しくなかった。けれど、一つ一つを実地でやってみると、何かと便利なきが多かった。感心し、最初のうちは私も、村のみんなにその叔父さんの遺した術すべを教えていた。

けれど、段々と「どうしてそこまでやってやらなければならぬんだ？」という疑問が私の内で大きくなっていった。叔父さんだったら、こうした発見を大勢に向けて語ろうとするだろうか。オンデイラ叔父なら、自分の考えたことは自分の持ち物なのだから、他人に話すなどもってのほかだ、ぐらいのことは言いそうである。私も元々多弁な方ではないし、今となつては、村にあまり親しい友人もない。そこであえてあれこれ教えてやるのも、面白くなかった。

仕事場から家へ戻ると叔父さんの残した言葉を読み取り、炎を操り、毎日が過ぎていく。そうしていると次第に、一日が長くなっていく気がした。周りの同い年の者たちは歳をとるごとに時間が短く感じられるというけれど、私は逆だった。炎と共に生き、炎を見つめていると、時間は緩やかに流れた。

炎は私の目の前で飛び上がり、伸び上がり、あるいは横に拡がり、転がり、滑稽に戯れ、しきりに戯けてみせ、時には膨れあがりたり縮んだりしてみせた。私は彼らの素振りを熱心に眺め、たまに笑った。叔父さんの書き残した文言は、いちいち正確で、私は徐々に叔父さんがどんな眼で炎を

見ていたか、そして、世界を見ていたかを理解していった。

「炎は炎だけで動いているのではないということだ……オブラには今、炎しか見えんだろう？ でも炎は炎だけではないのだよ。炎には向かう先がある。俺はそれを知っているに過ぎん。行く先を知っていれば操るのが用意なのは、人間と同じだ。だろう？」

きつと、そうなのだろう。

11.

いつのことだったか、炎が死ぬ様を見た。

あれは、秋も終わりのことだった。植物を集めに行った私は、出先の森の間際、やや荒れた草原の端で、死にかけた炎を見つけた。あまりそんなものを見かける機会もないので、私は炎を怒らせないよう気を付けながら、そつと近寄っていった。

炎はもう、すっかり弱っていた。揺らめき方がすでに普通でなかった。言葉にするのが難しいが、死にかけた、炎は腐ったような揺らめきを見せる。やや歪み、形が曲がり、色合いも少しおかしかった。そして何より、動きがなかった。元気に生きているうちは自由に飛びはね、どんな動物よりも活気に満ちて振る舞うのに、今や彼は、陽炎かげろうのようだった。

私はしゃがみ込み、炎を看取ってやることにした。炎は苦しそうに草の合間を這って進み、どこか遠くへ行こうとしていた。そういえば、天変地異が起きたときには生きている炎は一斉に姿を消す、と聞いた憶えがある。自分の死の時も同じなのだろうか。叔父さんの書き物にも、炎の死についての詳細な記述はなかった。私は黙って、炎を見据えた。

木々の影が落ち、やや暗い草原を、炎は少しずつ進んでいった。炎が擦っても、周囲の草葉は焦げ付きもしなかった。炎が発する光は、悲しいほど弱かった。暖かみもほぼなく、ただ、あやふやな影が地面に映るだけだった。

やがて、炎の歩みは止まった。炎はそこで、静かに燃えているだけになった。もうここまで来ると、揺らめき方にも異常なところはない。ただただ、微かに燃え続けているだけだ。火勢が弱いくらいで、動きもせず、その場で燃えている。私はすぐそばまで近寄ると、そんな炎をじっと見ている。

炎はずっと、音も立てずに燃えていた。

私は炎に手を伸ばした。指先で触れてみる。すると、意外なほどに熱かった。私は小さな声を上げて、手を引いた。数本の指先が火ぶくれになった。私は涙ぐみながら、指を口の中に入れて冷やす。ひよつとしたらもう熱くなくなっているのではないか、と考えたのが甘かった。全く変わっていなかったのだ。ひどく熱かった。指先の痛みは刺すように悪化していった。私は涙を流した。

そうするうち、不意に炎は、ふっと消えてしまった。

あ、と思ったときにはもう、どこにも見あたらなかった。あつけないといえど、あまりにあつけなかった。どこかへ吸い込まれたのか、霧のように散ったのか。渦を巻いて消えたようにも見えた。もう炎は、どこにもなかった。私は炎がいなくなった場所を、一人でじっと見ていた。

それから立ち上がると、集めた植物をしっかりと抱えて、村へと戻っていった。

—了